
シンポジウム 5

維新企画 5 : 進行性腎癌の新しい逐次薬物療法

座 長 古 川 順 也 (徳島大学大学院医歯薬学研究部 泌尿器科学分野)
神 波 大 己 (熊本大学大学院生命科学研究部 泌尿器科学講座)

司会のことば

「シンポジウム 5 : 進行性腎癌の新しい逐次薬物療法」では、複合免疫療法時代における逐次治療戦略について、多面的かつ実臨床に即した視点から議論を深めることができました。一次治療の多様化を踏まえ、“その先”を見据えた治療設計をいかに行うかという、現在進行形の課題に真正面から向き合うセッションとなりました。

まず富田先生からは、IO + IO 療法後における二次治療としての TKI 単剤療法の位置づけについて、近年の RCT および主要ガイドラインの更新を踏まえた整理が示されました。免疫複合療法後に TKI へ IO を上乗せする戦略は複数試験で有効性が否定されており、二次治療としての IO 再投与は推奨されないことから、現状では IO + IO 療法後の主な選択肢は TKI 単剤となる一方で、TKI 同士を直接比較した RCT はなくエビデンスはなお限定的であることが強調されました。こうした状況のもと、JUOG 多施設コホートに基づきカボザンチニブとアキシチニブ間で PFS・OS に大きな差を認めなかった成績が紹介され、実臨床での薬剤選択に資する具体的な判断材料が提示されました。

続いて山本先生からは、IO + TKI 療法後の病勢進行症例を念頭に、免疫療法および TKI に対する初期・獲得耐性機序が整理され、それを踏まえた二次治療としての TKI 単剤やニボルマブ単剤の使い分けについて、分子メカニズムとエビデンスの両面から明快に示されました。耐性克服という一見抽象的なテーマが具体的な症例イメージと結び付けて提示され、会場からも活発な質問が寄せられたことが印象的でした。

穴見先生からは、HIF-2 α 阻害薬ベルズチファンを中心とした新規薬剤の最新データが紹介されました。既治療例を対象とした LITESPARK-005 試験における有効性と忍容性、さらには現在進行中の新規試験の概要が示

され、第3次パラダイムシフトを見据えた今後の逐次治療における位置づけが議論されました。従来薬とは異なる作用機序を持つ薬剤を、どのタイミングでどのような形で組み込むのかという視点は、今後の治療アルゴリズムを大きく変え得るものと感じられました。

高齢進行性 RCC については植田先生より、ICI + TKI 時代における「最大治療」ではなく「最適治療」の継続の重要性が、豊富なリアルワールドデータと老年医学的視点を交えて提示されました。フレイルや併存疾患、サポート体制を踏まえた投与量調整・治療休薬の工夫が QOL と治療成績の両立に不可欠であることが共有され、高齢者診療における教科書には載りにくい“勘どころ”が伝わったのではないかと思います。

最後に大庭先生から、TKI・IO 時代を通じて変遷してきた CN の役割、とりわけ deferred CN の意義について概説いただきました。CARMENA・SURTIME 以降の知見に加え、近年の報告を踏まえた「逐次治療の一部としての CN」というコンセプトが提示され、どのタイミングで、どのような症例に外科的介入を組み込むべきかという、極めて実践的な議論が行われました。薬物療法と外科治療をいかに有機的に結び付けるかという問いは、本企画の重要なハイライトであったと感じています。

本シンポジウムを通じて、IO + IO 療法・IO + TKI 療法後の薬剤選択、新規機序薬の導入、高齢者への配慮、外科治療の統合まで、進行性腎癌の逐次薬物療法はもはや単一の治療モダリティでは完結しないことが改めて示されました。ご講演いただいた演者の先生方、活発にご議論いただいた会場の先生方に心より深謝申し上げますとともに、本セッションで得られた知見が、必ずや先生方の日常診療における一例一例の治療戦略立案に役立つものと確信しております。